

妻・母という〈女〉

——「桜桃」試論

鶴 谷 憲 三

はじめに

「斜陽」(『新潮』昭22・7～10)、「人間失格」(『展望』昭23・6～8)という太宰治の代表作の間に、十の短篇が発表されていることは夙に知られている。これら短篇群の一つの特色は、妻・母という〈女〉の存在がその世界の重要な因子をになつてゐる点にあると思われる。男性(逆の場合は女性)の作家が異性を如何ように認識し、形象化しているかという問題は興味深いものがある。たんに資質などでは処理できず、その像の形象化には作家の文明批評的洞察、さらにはその全存在まで関わつてゐるとしても過言ではあるまい。と同時に、実作者の側でもこの想いは強いはずである。次の文章は武田泰淳の「女について」の一節である。

作家は女と共に生きることによつて、はじめて自分が何者であるかを知る。他人が彼をこのやうなものだと思ひこみ、世間が彼はこのやうなものだと言ひきかせてゐたその自分ではなく、真に自分が何者として生きてゐられるかを示してくれるのは常に「女」なのである。そしてそれなくしては、作家は永久

に、たんなる小説つくりを終り、文学者として出発することはできない。まして救はれることはない。作家は、まず自分を書き、自分以外の人間を書かねばならないが、この二つの事業は、女を書くことによつてはたされる。何故ならば、女は女自身すべての悪なるもの、善なるもの、人間的なるものであり、またそれらを呼びさすものだからである。

この時期の太宰治が描く女性の系列には、母性的なタイプ、母の系譜みたいな存在、不可解な他者という存在、強い生命力をもつ存在の三種類があるとは東郷克美の評言である。もつとも、この分け方はあくまで便宜的なものであることは提言する氏自身も承知の上のことにはちがいない。個々の作品にあらわれた像を仔細に検証すれば、いずれとも決めかねるものが顕現するからである。区切り・図式化という機能は顔立ちを明らかにさせる反面、重層化するものを平板にさせたり、曖昧なものを消去・脱落させるといふ側面をもあわせ持つと言ひ換えてもいい。

「桜桃」(『世界』昭23・5)の〈妻〉・〈母〉なども規定を明確にし難い女性像と言えるのではなからうか。東郷氏の先の分類にあて

はめてみても、いかなる事があろうと子どもを守りぬく、包み込むという点では「母性的なタイプ」と言えようし、（言ふことに、いとも、つめたい自信を持つてゐるという点にアクセントを置けば、「強い生命力」の持ち主であり、そういう在り様が「私」には了解不可能な「他者」と映じるのだから、終局の段階では分類そのものを無効にしてしまふ。

太宰治の忌日の銘がこの作品に負っており、知名度が高いにもかかわらず、「桜桃」ほどその評価・位置づけが後述の如く多岐にわたっている作品も珍らしい。いやむしろ、「不逞なる反語の底にひそやかなる含羞を蔵する」太宰治の「父親の愛情が美事にも」象徴されて艶を放つ「珍重すべき」短篇であるとする同時代評註以来、敬して遠ざけられ、その世界と真に対峙するようになったのはごく最近のことと述べて不遜の言とは映らないのではなからうか。この小稿では「桜桃」の夫婦の関わり、とりわけ「妻・母」が如何ような相貌を「夫・父」である「私」に示しているかという点に焦点を絞り、その形象化によって「真に自分が何者として生きてゐるか」を作家太宰治がいかに認識したかを考察してみたい。

1

図式化に伴なう負性をおそれず、現時点における「桜桃」理解の「多岐性」をまず略述・整理してみよう。

この作を「自殺寸前のぎりぎりの心境が描かれている私小説的短篇」であつて、「技法的にも間然するところなき完璧な傑作」と推奨したのは奥野健男である。更に言葉を継いで奥野は、

この作品にいたつて太宰の倫理観、価値観は、実の社会のそれと完全に転倒し、虚の世界のそれになる。

とまで言い切つてゐる。註私小説的の「的」がくせものであるが、彼の出發となつた『太宰治論』（近代生活社、昭31・2）において、四歳の長男を例にとり、「どうにもならぬ彼の倫理的潔癖性の悲劇」と位置づけていることも視野に入れれば、いわゆる私小説とこの作品をみなしていることは明らかである。「桜桃」が私小説であるとするこの捉え方は、今日まで有効性を保持している。しかし少しく分け入れればその観点も異なる。小野正文は「われ山にむかひて『桜桃』私観」（『太宰治5』洋々社、平1・5）で、太宰は家庭という関係の中で「私」をどう位置づけるかに「苦心し、混乱している」ため、奥野とは異なり「私小説という、この国独自の身辺小説の特徴」が分裂していると説く。私小説という観点では同一であるが、混乱・分裂よりも関係からの強い自立志向を前面に押し出すのは「『桜桃』子供より親が大事」（同前）の久保田芳太郎である。久保田によればこの小説の主題は、

血と家族をきつぱりと否定し、個と実存にひたすら生きようとするテーゼ

にあることになる。奥野、小野、久保田に共通する志向性を、作中の主人公「人間」太宰治に力点があるとみるならば、実生活者と芸術家との対立・葛藤を読み解く切り口もはやくから存在した。福田恆存がこの代表で、個人的な想い入れに流れすぎ、この作品は「弁解がましくなつてゐる」（『定本全集9』解説）筑摩書房、昭36・12）と指摘する。福田の見解は大江健三郎の「通俗」すぎる（『現代文

学と太宰治』『文学界』昭35・6)という評言を経て、次の菊地弘の「『桜桃』論」(『太宰治3』教育出版センター、昭54・4)まで一つの水脈をなしている。

桜桃を「食べては種を吐き」に主人公の生の地獄苦が反映し、そこを乗り越えられないというところに力点を置けば、「桜桃」という題名のもつ意味とはやはり乖離した(中略)中途半端の出来栄の作品といえる。

また(ひそやかなる含羞(白田甚五郎)に作家太宰治の特質を看取する視点は、人間の弱さの吐露であり、その「表白のしかたは、一見、倨傲のようであるが、含羞の心理」こそ真実とする長谷川泉の「含羞と倨傲」(『解釈と鑑賞』昭49・12)へと今日まで受けつながら、作家太宰治の本質へのアプローチという姿をとる。「桜桃」を明確な構成に支えられている計算され尽くした作品と読み取り、多様な視点から言及されるようになったのは、ごく最近のことといっても過言ではあるまい。

相原和邦は主人公の自称の多様さに着目し、「子供や妻との『鎖』のからまりを感じるだけ、一層親の立場、夫の立場を強く打ち出そうと」したが、その主張は「願望の域」に終らざるを得ぬ微妙なずれを描こうとしたと説く。「直接子供に対しての自己正当化というより、妻にあてつけた自暴自棄の居直り」を描いた、文字通りの「夫婦喧嘩の小説」とするのは首根博義である。首根の主張は「子供を抱えた『母』の不動の強さ」に対する「私」の驚嘆すべき想い、換言すれば、自己存在の在り様に盲目的信頼を寄せる女親の不気味さ、いらだちにポイントがある。そしてこの作品の巧みさはたゆた

う主人公の心の壁を間接的にしか語らない点にあるとし、それを支えているのが「最初から、作者と語り手の『私』と登場人物の『私』が共謀して話をはぐらかしていく」手法なのだと言(注)う。

太宰の方法意識の自覚化をより強調し、流動する「私」の在り方への明確な自意識が「桜桃」の特徴と評言するのは関谷一郎である。「個の自閉した懊悩を歌い上げる純然たる私小説作家」と、太宰の方法の決定的違いは自意識の強烈さにあり、「涙の谷」(現実と、拮抗すべき「山」)「不動の超越性の断念が主人公の流動をうながしている」と関谷は云(注)う。

関谷の論に触発されつつも、その見解は転倒されねばならぬと読み解くのは勝原晴希「非在の「山」に向かつて——太宰治『桜桃』の姿勢——」(『日本近代文学46』平4・5)である。勝原の力点は、関谷が説く「私」の自己同一性の不安定こそが逆に「私」の自己同一性の保持を示すことに他ならぬのであり、「桜桃」の精髓は「理念への祈願と理念への抵抗、いとしさ」としさへの抵抗との葛藤」という無限の往復運動にあるということにおかれているところにある。

評家の核心を管見に入つたかぎり「整理」し、その流れを展望してみた。切り口が入りみだれ、まさに百花繚乱の感があると言つてよく、この作品の位置が不安定であることが理解できよう。もともと、この短篇がこれほどの多様さを包含しているということは逆にその世界の豊饒さを示していることに逆説的に言えば他ならないことも確かであろう。

「桜桃」の世界は「子供より親が大事、と思ひたい」という一文

で開示され、虚勢みたいに眩く言葉は、子供より親が大事。」という章句で閉じられている。「思ひたい」とは実際にはそう思えない面があることをもの語っているし、後者も同様に「虚勢」という強がりにすぎぬことは言うまでもない。したがって、何らかの「揺れ」ではじまり、それが最後まで続いていることを明確に示している。なぜこのような自明のことから考察を始めたかという点、あたかも一つの理念が断定されているかの如き見解にしばしば出会うからである。典型的な例はすでに確認した奥野健男や菊地弘の評言にみられる。

「父」の「親が有るから子が育たぬ」がここでは、「子より親が大事」と居なおられている。(奥野)

作の冒頭と終末に「子供より親が大事」とあるように、個の確立が妻子、家庭のなかで対立して問われているのである。そうだとすれば……(菊地)

(傍点鶴谷、以下ことわりなき限り同様とする。なお太宰の引用は『太宰治全集』(筑摩書房、昭50・6、昭52・11)に拠った。)

これらの観点では、作品がはらむ主人公の「揺れ」・重層化されたものは読み取り難く、静止、固定、平板なものとしか映らないと言わねばなるまい。ひとまず言えば多くの評家(とりわけ「私小説」ととらない、あるいはジャンルを意に介さない評家)と同様にこの作品の「父」・「私」を等身大の太宰治と取る必要はない。「私小説」とは、「小説の時間と実生活の時間との混同ないしはインターチェンジアブル(交換可能)な関係」の小説であるとすると三好行雄の指

摘が一般的であろうが、その本質は、俗に云うその随筆性、日常茶飯性にあるのではなく、日常性の中に「非日常性」を発見するという逆説性にあると表現する平野謙の見解もある。「桜桃」には平野が云う日常の中の非日常という逆説は見出されないことも理由の一つに挙げてもいい。さらには視線の固定化という私小説的手法とも、この作品は決定的に異なっている。

太宰治があらさまに日常の家庭の実体、とりわけ子どもを「素材」として仮構化した作品は多いとは言えない。「桜桃」のほぼ一年前に発表されている「ヴィヨンの妻」(「展望」昭22・3)に「脳が悪いのではないかとも思はれ、三歳の子どもについて言及されている件くらいかも知れぬ。しかしながら、自分の子どもに想いを馳せなかつたと云うことでは決してない。津軽(小山書店、昭19・11)の一節に次のような箇所がある。意識的であれ、無意識的であれ、太宰また子どものことを想起せざにいられぬ年齢に間違いなくさしかつていたのである。

東京の草屋の子どもの事など、ふと思つた。なるべく思ひ出さないやうにしてゐるのだが、心の空虚の隙をねらつて、ひよいと子供の面影が胸に飛び込む。…(中略)…子供は百日咳をやつてゐるのである。さうして、その母は、二番目の子供を近く生むのである。

この文章には「桜桃」の冒頭や結末の章句とは異なり、「揺れ」・アンビバレンツな心情の振幅はない。「子供」や「その母」への卒直な感情の表白があるだけである。「心の空虚」をつくらなためには、何事かに打ち込み、関心を別の方に持っていくしかない。い

わば、自転運動を不断に自らに課する他はないのだ。
問題とすべきは、「桜桃」での心情の「揺れ」、アンビバレンツな想いの対象が何に収斂しうるかという点に関わろう。おそらく自分の多様さもこの点と連関しているはずである。

2

作中の自称の多様さと密接に関わる「桜桃」の構造については、すでに多くの評家の秀れた分析・言及がある。とりわけ、〈作者太宰治と語り手の「私」と主人公の「私」〉とを区別し、この三者が同一であるかの如く思わせる〈随筆風〉の語り口もあれば、自己を相対化した〈客観的な視点〉もあり、さらには〈妻の視点、語り〉の箇所もあると分析し、「桜桃」は〈妻の強さ、女の強さ〉を描くところに眼目があるとする曾根博義の見解に多くの示唆を得た。屋上屋を架することになりかねぬが、関係性、他者という点を軸にして、私見を述べてみたい。なぜなら、この点に作者太宰治の主眼点があると考えるからである。具体的には次の件である。

生きるといふ事は、たいへんな事だ。あちこちから鎖がからまつてゐて、少しでも動くと、血が噴き出す。

主人公〈私〉は〈血が噴き出〉ないようにするため、生の本質を知るがため、家庭はおろか日常生活での対人関係、さらには読者にもまで必死の〈奉仕〉にこれ努めている。しかし、自分の考えが理解されていないと思えないでいる。ここでの〈私〉の想いを仔細に説明すれば、左記のような評言に収斂するはずである。

人間と人間との〈関係〉のなかで、傷つくのはいつもよりお

おく心をあたえたほうだ。またよりおおく〈関係〉の意識の強度を体験したものだ。もつとも人間が傷つかない世界は〈習慣化〉された世界だ。…(中略)…人間と人間との〈関係〉で、あたえるものほど傷つくし、傷の深さはあたえる度合いに対応するというのは不都合であり、矛盾ではないか。それはなぜ、どこからやってくるのだろうか？ (吉本隆明『島尾敏雄』)

「桜桃」に子にも寄せる男親の心情が描かれていないわけではない。特に〈白痴・啞〉のおそれをいだかせる四歳の長男の前途に思いをはせる時、その想いは強く胸をしめつける。それは〈しばしば発作的に、この子を抱いて川に飛び込んでしまひたく〉なるほどの痛烈さである。

〈他者〉とは通常自分にとって了解不可能な存在の謂で用いられよう。個人のアイデンティティ(自己同一性)の獲得・不安・分裂について竹田青嗣は次のように説く。

人間は、何らかの形で自分が優越性や役割関係を持っている。という意識によつて、「私は私である」というアイデンティティを得る。そして、こうしたアイデンティティが確認できないと人間は不安になり、分裂する。私は私であるという確信が持てなくなる。

竹田によれば、アイデンティティの確立には他者のまなざしが不可欠であり、と同時にアイデンティティをゆさぶるものもまた他者と死となる。〈他者とは自分はこの人間であるという「私」の物語、「私」のアイデンティティを、つねに脅かす存在〉として個人の前に立ちふさがっているのである。^{註10}

四歳の長男に象徴される子供に〈私〉が自らのアイデンティティをゆさぶられていないわけではない。自己抹殺という△死▽が如実に浮かび上がるからである。しかし、少なくとも子どもから男親へという〈まなざし〉は皆無であり、逆に〈役割関係〉の〈意識〉の強度は十二分にうかがわれる。思うに父親である〈私〉にとつて、子どもたちのうるささは、了解不可能な〈他者〉として映じているわけでない。せいぜい〈ひとりぶつぶつ不平を言ひ出す〉程度のことである。作者太宰治にとつて子どもがエゴイストであることは自明なことで、逆に変にもわかりがいい存在であったなら、むしろ奇異に映るにちがいない。生まれたばかりの赤子を殴る四歳の娘を引き合いに出しながら、俗に云う子供の純真さを否定して〈感覚だけの人間は、悪鬼に似てゐる。どうしても倫理の訓練は必要である。〉(「純真」『東京新聞』昭19・10・16)と力説したのは、三年半余り前のことである。子どもの持つ本質は十二分すぎるほど理解して、いたと思うのである。

同様に〈太宰といふ作家〉である〈私〉にとつて文芸評論家なり、読者が自らのアイデンティティをゆさぶる〈他者〉の名に値する存在としてこの短篇で描かれているかという点になると疑問なしとはしない。〈私は悲しい時に、かへつて軽い楽しい物語の創造に努力する〉という小説作法や、△書く▽という営為に伴う産みの苦しみは弁解気味に語られている。

あまりたくさん書ける小説家では無いのである。極端な小心者なのである。それが公衆の面前に引き出され、へどもどしなから書いてゐるのである。

しかしこれらは、了解不可能な〈人〉・〈読者〉へのプロテストというよりも、〈一生懸命〉に生きているとする自分の姿勢を語つたものであり、〈糞面目で、興奮めな、気まづい事に堪へ切れない〉自らの性情を吐露したものではなからうか。〈糞真面目で、興奮めな、気まづい事〉を〈つめたい自信を持つて〉、言い得ているのは、女親である〈妻〉だけである。したがつて、男親、作家という役割は比重が小さく、家庭内における母親が、〈私〉のアイデンティティをゆさぶる〈他者〉としてたちふさがつて、と考えるのが妥当であらう。

すでに曾根氏の精細な分析があるので、簡略に述べるが、「桜桃」の世界にわけ入るにはやはり自称の問題が不可欠と思われる。自称は〈話し手の待遇意識〉の〈反映〉^{注12}であり、他者との関係意識が暗黙のうちに語られている。最も頻度が多いのは〈父〉(〈お父さん〉を含む)の二一回、ついで〈私〉が一九回、〈親〉五回、〈夫〉〈自分〉〈おれ〉が各三回であり、ちなみに母親の代名詞は〈母〉一三回、〈妻〉二回、そして〈お前〉が一回である。これらの呼称を考察する場合、小説内現在という時間の問題も無視できないのではなからうか。と云うのも、先にあげた自称の使用には、ある傾向がうかがえるからである。

「桜桃」の小説内時間は、ある夏の夕食時にはじまり、〈夫婦喧嘩〉の後、〈家の中の憂鬱〉にたえきれなくなつて酒場で桜桃をたべる結末までの、ほんの数時間にすぎない。〈夫婦喧嘩〉とは言うものの、内実は派手な口論や立ち回りがあつたわけではない。あくまで男親の側の意識でとらえられた現象なのであつて、実際の男親はただだ

だ沈黙しているだけである。

(A) 涙の谷。父は黙して食事をつづけた。

(B) 母に言はれて父は黙し……

(C) 「涙の谷」さう言はれて、夫はひがんだ。しかし言い争ひは好まない。沈黙した。

(D) 「そんな……」父はまた黙した。

(A) から (D) は小説内の短い時の推移を示しており、その件における自称は〈父〉が大半を占めている。〈父〉・〈母〉は子供の存在が前提となつている呼称であり、これらの前後に〈私〉というより多くの役割をになう、客体化された自称の件が配置されている。すなわち、(A) の〈母〉のことが発端となり (B) の後に続く〈誰かひとを雇ひなさい。どうしたつて、さうしなければ、いけない。〉とおそるおそる〈咳く〉までの件の自称は〈私〉が中心であり、繰り返すことめいたモノローグが続いている。ついで〈母〉のまなざしに支配された件があらわれる。

子供が三人。父は家事には全然無能である。蒲団さへ自分で上げない。

この〈母〉のまなざしは、次第に誰の語り口とも判然とせぬ分明なものに移り、ある父親が啞の次男を殺すという新聞記事を境に〈私にヤケ酒を飲ませる〉と〈私〉の視線へと明確に変化している。(C) から (D) の〈涙の谷〉それが導火線とする小説内現在で再び中

心となるのは〈父〉と〈母〉であり、二人の関係が〈この夫婦〉と云う距離をおいた叙述から〈おれだつてお前に負けず、子供の事は考へてゐる〉と〈私〉の主情性が直接的に浮上する語りの層まで幾つかのレベルの語りが混在する。この小説内現在は〈仕事部屋のほうへ出かけたんだけど〉まで続き、〈私〉の内言が再度語られ、結びは〈父〉の〈虚勢みたいに咳く言葉〉で終っている。

この語りの様態を考慮に入れれば、その視線が静止・固定しているいわゆる私小説とは決定的に質が異なることは明らかである。「桜桃」は作者太宰治によつて微妙な語り口が使い分けられた、緻密な計算のもとになる小説なのである。もつともみやすい件は同内容を示す以下の章句である。〈配給だの、登録だの、そんな事は何も知らない〉とは〈母〉のまなざしでとらえられている〈父〉の姿であり、これに対し、〈配給や登録の事だつて、知らないのではない、知るひまが無いのだ〉(傍点太宰)とは〈父〉の言い分である。作者太宰はこうしたいずれの語りをも統括している存在であつて、微妙な語りの△揺れ・ずれ▽を自由自在にあやつつていふと言わねばなるまい。

「桜桃」は〈鎖〉、すなわち関係性の問題を主題とした小説であるが、その中心は子どもとの関わりにあるのではなく、〈父・夫と母・妻〉との関わりにあるのである。そしてその核を成すのは〈父〉の立場から言えば、自己を不安や分裂に陥し入れずにはおかぬ〈他者〉としての〈母・妻〉である。この時、〈父〉のアイデンティティが現実性に欠くる事があつたとしてもかまわぬ。衣食住を中心とする日常的現象だけが現実ではなく、とりとめもなく空想をめぐら

したり、非現実的なことを夢想する時間も間違いなく現実の姿であるからである。

作家である〈父〉が内心思い描く作家像、すなわち

おれだつて、兇暴な魔物ではない。妻子を見殺しにして平然といふやうな「度胸」を持つてゐないのだ。

とする像に異となえることはもちろん可能なのである。〈父〉として日常生活の中で苦しみに耐え続けている〈母〉の姿を知らないわけではない。ただどうしても理解できぬのは〈つめたい自信〉をひめて、動じようとしないう、又はそういう自己の存在を疑おうともしない〈自覚の無さ〉という点なのである。

〈白痴・啞〉かも知れぬ四歳の長男に対して〈父〉である〈夫〉は発作的な無理心中を夢想する。いわば〈死〉による自己不安・分裂の停止である。これに対し〈母〉である〈妻〉は〈固く抱しめる〉のである。どういう状態になろうが自分だけはみはなさない、最後まで包み込もうとする。この対比が両親の違いを象徴的にも語つていよう。〈この女も、たいていそんなものであるが。〉という註釈があるが、この〈女〉とは女性一般をさすわけではない。極言すれば〈女〉は弱いかも知れぬ。強く、不動なのは子を持った女、すなわち〈母〉であることを言いたかつたと思われるのだ。

日常性とは今日と同じように明日も又やってくることを疑わぬことが前提となっている。もしこの前提を疑い出したら際限もない自意識の分裂・不安を惹起することになる。しかしながら人間存在の本質は、いつ、いかなる場所でも何がおこるかわからないのである。いわゆる親死に子死に孫死ぬという言葉は一見不吉な感じを与えず

にはおかぬが、少し角度をずらすだけで如何に〈自然〉な状態を表しているかが理解できる。この喩で言うなら、〈母〉である〈妻〉の存在は日常性とアナロジーに他ならず、〈父〉である〈夫〉は非日常性のアナロジーなのである。いずれが人間存在の本質を衝いているかは言うまでもない。

日常的現実からみれば、ここでの〈私〉は仕末におえぬ、わがまま者である。なぜなら〈女房〉の願いを知りつつも、あえて自分のためだけに無視するのであるから。

「今夜は、私、妹のところへ行って来たいと思つてゐるのですけど。」それも、私は知つてゐた。妹は重態なのだ。しかし、女房が見舞ひに行けば、私は子供のお守りをしてゐなければならぬ。

おそらく〈私〉は、この願いを以前から知らされていたはずである。そして〈思つてゐる事〉をハツキリ主張できぬ〈私〉は、その時、曖昧な形でも承諾していたにちがいない。両者の決定的な違いは、日常的現実の苦しみの深淺などにあるのではない。〈つめたい自信〉と〈自信〉の〈無さ〉という自己存在への自覚の有無に関わつていのである。再度確認すれば〈他者〉とは〈私〉の〈物語〉・〈アイデンティティ〉を〈脅かす存在〉の謂である。〈私〉がのぞむ世界・自己像がフィクションによつて作り上げられていようがいまいが、それは問題外である。「桜桃」での〈私〉はそういうことを全く意識にのぼらせない〈妻〉に対してやりきれなさ、〈憂鬱〉を覚えていたのであり、ときとすれば、〈何か切りかへされたら、ぐうの音も出ない〉自分のほうが何か欠如しているのではないかと思ひ惑う

のである。吉本隆明の評言をかりて言えば、△関係▽の意識の強度を強く意識するほうが、かえって関係という△鎖△から脱がれようとする消極的な姿に映るといふ逆説がここには提出されているよう。ここでの△母△である△妻△には、例えば次のような機微はとうてい理解不可能なことにちがいない。

ヴァレリーの言葉、——善をなす場合には、いつも詫びながらしなければいけない。善ほど他人を傷つけるものはないのだから。

(美男子と煙草)

常識的にはもつとも身近でありながら、逆にそれだけに距離のへだたりをより自覚せざるを得ない△他者△、この点に△私△からみた△妻△の本質があると言わねばなるまい。△冷たい自信△に満ち、不動の巖のような△他者△の前に表面的には黙し、内面でただ△私△はひたすら流動し、揺れ続けるのみである。結末の章句の三度のリフレインもこう考えるとよく理解できるのではなからうか。

父は太血に盛られた桜桃を、きわめてまづさうに食べては種を吐き、食べては種を吐き、食べては種を吐き……

おわりに

「桜桃」は、いわゆる私小説などではなく緻密な構成のもとにある小説である。この作品の眼目は△鎖△のからまりという△生△をもつとも身近な妻・母という△女△と対比させることによつて問い直す点にあった。そのためには、妻・母という△女△とは何かという本質を確認する必要があるためである。すでに引用した吉本隆明に做つて言えば、△関係▽の意識の強度に思いをはせるものほ

どたゆたたい、思い惑うことになり、逆にそういうことを一切自明なものとして疑おうとしない人間ほど△強く▽見えるというアイロニーが生ずる。それは又、日常性の本質にある非日常性を自覚している人間と、無自覚な人間との差異と言つてもよい。前者を象徴するものが、夫、男親である△私△であり、後者を象徴するものが、妻・母親という△女△なのである。

子どもという対象を前にして、なぜ女親はこれほど△強く▽ありえるのか、本質的な動揺はないのか。この△私△の問いが、男の言説が大半を占める「桜桃」の基本となつており、その答えは結局みつかからない。この問題を強く意識すればするほど、△私△は揺れ続け、不安・分裂をますますだけなのである。

注1 武田泰淳「女について」

(『人間・文学・歴史』厚文社、昭29・5)

注2 東郷克美「鼎談昭和20年〜23年の太宰治をどう読むか」

(『解釈と鑑賞』昭和63・6)

注3 白田甚五郎「暁のおとなび―太宰イズムの転機―」(『国学院

大学新聞』一九四八・五・二五)、ただし引用は山内祥史編『太

宰治論集同時代篇2』(ゆまに書房、一九九二・一〇)に拠る。

注4 奥野健男「太宰治」(『文芸春秋』昭48・3)

注5 相原和邦「『桜桃』論―自称の変転を中心として」

(『太宰治5』洋々社・一九八九・六)

注6 曾根博義「『桜桃』鑑賞」(『太宰治5』洋々社、一九八九・六)

注7 関谷一郎「『桜桃』試読」(『太宰治5』洋々社、一九八九・六)

注8 三好行雄「日本の近代文学」(『塙書房』一九七二・七)

注9 平野謙「私小説の二律背反」

(『芸術と実生活』新潮社、昭39・4)

注10 竹田青嗣「『自分』を生きるための思想入門」

(『芸文社』一九九二・五)

注11 注6に同じ。

注12 池上秋彦「自称」(『日本文法大辞典』明治書院、昭和46・10)